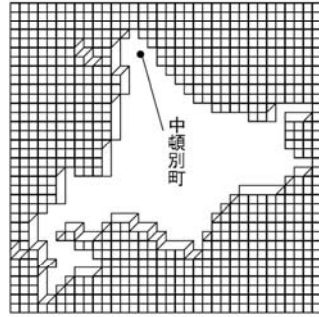


## 連載



あのマチ  
・地域おこし活躍中  
このムラ

No.45

### 中頓別町の事例

一流のいなかつくりへの挑戦

#### 中頓別町の概要

北海道を南北に縦断する高速道路「道央道」を北に走り稚内方面に向かう。最近開通したばかりの終点「恩根内」インターチェンジを降りて国道二七五号線を走ること約一時間、やっと中頓別管内に入る。いくつかの酪農家の農場を過ぎて、最初が目にはいるのが独特の優雅な形

をしたピンネシリ岳とその裾野にある道の駅と温泉を中心としたリゾート施設である。この地区を玄関口とした中頓別町は比較的まとまった、丘陵地帯に展開する人口二、五〇〇人の酪農と林業の町である。

酪農の経営規模は大規模化が進む宗谷管内にあつては、一戸あたり経産牛飼養頭数四四頭、草地面積四八畝と比較的小規模である。その要因としては

頓別川、ペーチャン川の二本の河川流域の比較的平坦な地帯を除き、大部分が丘陵傾斜地で、大規模化の条件である効率的な農作業が困難だったためであろう。また、今まで外部からの新規就農者もほとんど無かつたとのことだが、地理的な制約等から管外との接触も比較的少なく規模拡大や技術革新に関する刺激がやや乏しかったからかもしれない。

#### 中頓別町の歴史

中頓別町の歴史は明治時代に遡ることができる。明治の中期に、町内ペーチャン川で発見された砂金によって文字通りのゴールドラッシュが始まり、何もない田舎に突然一六、〇〇〇人もの人たちが一獲千金を夢見て集まつてきた。

中頓別の農業の始まりは、こ



ピンネシリ岳を望む牧場風景

の中の一人、榎原民之助が中頓市街に定住して農耕を始めたことに端を発する。直径一メートルを超える大木の茂る、うっそうとした頓別原野を、機械もないうちで開墾する苦労は想像に難くない。

大正二年の道道開通、大正五年の鉄道開通というインフラ整備によって製材事業が盛んとなり木工場が次々と操業を開始。大正十年には頓別村から分村、昭和二十四年には中頓別町になった。しかし、林業の衰退とともに昭和二十五年の七、五九二人をピークに人口は減少し始め、平成元年、天北線廃止とともに町外からの流入が極端に減少した。

中頓別町農協は戦後昭和二十三年、自作農四五五戸によって設立された。当時戦後の不在地主の農地解放と、主に樺太からの引き揚げ者の緊急入植とが相まって、自作農が急激に増え六

〇〇戸に近い農家が主に馬鈴薯を主体とした畑作経営を行っていた。

最盛期には集落ごとに、五〇もの澱粉工場が操業、活況を呈していたが、三十年代に入ると相次ぐ冷害と、でん粉価格の低迷で、離農が相次ぎ、残った農家も酪農への転換を余儀なくされた。昭和四十三年には町内最後の農協合理化澱粉工場も操業を停止した。

この三十年代が農家にとっても、農協にとっても最も厳しい時代だった。酪農への転換で農業機械や生産設備の導入、草地の造成、基盤整備といった設備投資を必要とし、負債がかさむ一方で、乳量を主体とする生産はそれほど伸びないという状況が続き、農協が信連への資金借り入れに奔走する時期が続いた。しかし、三十一年に森永乳業の工場誘致に成功したことが酪農



中頓別町内ガイドマップ  
鍾乳洞他の様々な見所が案内されている

専業地帯への転換の引き金として機能した。そして五十九年には念願の農民工場としてよつば乳業中頓別工場が操業を開始した。こうした困難を乗り越えながら、一方で昭和五十六年から酪農負債整理資金の導入により、本格的な負債対策に取り組み、農家、農協や町など関係機関の一致協力の下に見事に負債償還を終えたとのことである。

### 農業の概況

平成十六年で生乳販売農家が六〇戸、一戸当たり草地面積が六一畝、一戸当たり乳牛飼養頭数が経産牛四頭、育成牛二三頭で、一戸当たり平均三六〇リットの生乳を生産している。

この規模は宗谷管内はもとより、全道平均に比べても規模が小さいことがわかる。

フリーストール化を実現して

いる農家も七戸に過ぎない。そして三〇畝未満の農家が一一戸ある。この零細経営規模の存在が二極化構造をもたらしているほか、農地の分散が現状の大きな課題となっている。これまでは、離農跡地を近隣農家が吸収する形で維持してきた農地も、

中頓別農業の概況

項目	中頓別	宗谷管内	全道	
乳用牛飼養戸数(戸)	60	705	9,030	
草地面積(ha)	3,650	54,090	570,100	
1戸あたり草地面積(ha)	61	77	63	
乳牛飼養頭数	飼養頭数	4,110	63,470	863,700
	内2歳以上	2,870	41,700	545,600
1戸あたり2歳以上飼養頭数	48	59	60	
生乳生産量(t)	21,610	286,696	3,849,338	
1戸あたり生乳生産量(t)	360	407	426	

北海道農林水産統計年報 平成16年版から

今後は引き受け農家が近隣では見つからないという問題が顕在化しつつあり、実際に耕作放棄地も見られるようになってきている。草地は田畑と違い毎日維持管理を必要とするわけではないが、それでも飛び地は作業効率が落ちる。交換分合等の農地集団化の課題にも取り組む必要がある。

## 第六期中頓別町

### 総合計画

中頓別町では第六期中頓別町総合計画として二〇〇二年からの一〇年の長期計画を策定して町の活性化を目指している。その中でユニークなのは、最終年次における目標人口をあえて設定していない点である。そしてその理由をこのように説明している。「目標の数値は設定していません。しかしそれは人口が減

ってもいいとあきらめたからではありません。これ以上もう一人たりとも減らしたくない」。その思いを込めて作った目標は、この基本構想そのものです」と述べてこの計画をやり抜く意志を表明している。

そして、そのために、少しでも多くの人が将来にわたって暮らし続けることのできる、住みよい町づくりを具体的に掲げている。総合計画策定の事前調査として、全町民を対象にアンケート調査を実施、その設問の中から地域の主産業である農業に関連した興味深い項目を取り上げると次の点である。

「あなたが中頓別町住民として、ほかの町に対してもっとも誇れるものは何ですか」という問いかけへの回答として多くの住民が、①豊かな自然環境、②暖かな人と人とのつながり、③安心できる保険医療福祉サービ

スをあげている。確かに、この小さな町で医者や二名確保しているという点は特筆に値するし、医療施設の整備されている都市から遠隔の地では何よりも重要度が高いのは当然であろう。また、町民全体が顔見知りという点でも、宿泊したホテルの従業員に、今回初めて訪問する農協理事の森川さんのことを尋ねたところ、道順のみならず、人となりや家族構成まで懇切に教えてくれたほどである。

また「今後中頓別町の将来のために重要と思うことは何ですか」に対しては、ダントツで、①地域医療・福祉の充実と、②農林・商工・観光等産業の振興という二つを回答者のほとんど全員が希望している。

住民の希望を受け止めて、着実に施策に反映しようとしている事例として、「こども館」の活動を紹介したい。町内には三歳

になると、ほとんどの子供が通う「こども館」があり、そこにはたくさんの本と出会える立派な図書館の機能がある。しかし、問題は三歳までの期間、家庭でどのように子供たちに本と接する機会をあたえるかであるが、それをフォローするためには「ブックスタート」制度を発足させた。六ヶ月検診に訪れるお母さんと子供にその年齢にあった絵本を二冊プレゼントして、ボランティアが実際に読んであげるといふ。三歳になるまでにボランティアに逆にな本を読んで聞かせる子供までいるといふ。

町民同士が赤ちゃんを介してお互いに知り合い、輪が広がるすばらしい交流の場になっていることである。





堆肥センター

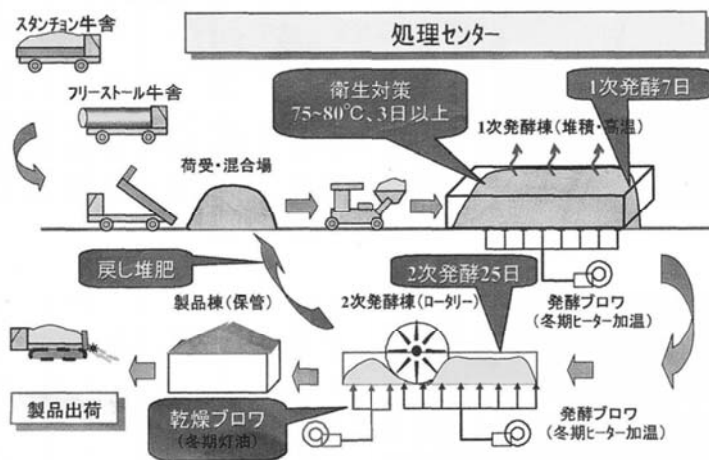


中頓別らしい警告標識

## 堆肥センターの導入 (設置)

地元の住民に聞いても「公害なんて、牛の糞尿と人間の出すゴミ、そして車からポイ捨てされる空き缶くらいだ」というくらい公害、汚染とは縁のない地域だが、それだけにそのクリーンさを維持する努力も大切である。

確かに、家畜排泄物が地下水や河川の汚染、悪臭、病害虫の発生などを引き起こし、地域としてこれが最大の環境問題となっている。平成十一年十一月一日に「家畜排泄物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」が施行され、平成十六年十一月までに適正な施設を整備し、処理することが義務づけられたことに伴い、従来のような野積みや素掘り尿だめが許されなく



堆肥センターフローチャート

なった。

経営環境が厳しくなる中で、この糞尿問題に自己完結で取り組めるのは、比較的経営規模の大きな農家で、小規模農家の多い中頓地区においては、経営の負担になっていた。

その対応策として「中山間地域総合整備事業」で集落環境管理施設として堆肥センターを導入することとした。センターの処理能力としては中頓別地区の酪農家の三分の一にあたる一八

戸、一、八〇〇頭分の糞尿を処理し、基本は地域内還元するとしている。これによって処理施設で産出された液肥や堆肥を地域農業者や地域住民に還元し、地域ぐるみで公害のない快適な環境づくりに取り組みたいとしている。

この液肥・堆肥の草地還元によって、地力を向上させ、ひいては良質自給飼料の確保、乳肉

質の向上につながることや堆肥投入による有機栽培の新規作物を開発し、できれば市民農園「オガル」や町営の加工実験・展示施設である食彩工房「もうもう」で加工品開発にまで結びつけられないか、というのが町関係者の夢である。折しも生乳消費の伸び悩みに関する対策が必要であるが、チーズをはじめとする乳製品の加工開発にも取り組みたいと意欲的であった。

食彩工房「もうもう」ではみそ、パン作り、そば打ち、町内でもれた蜂蜜と新鮮な牛乳で蜂蜜アイスクリーム作りにも挑戦できる。また、隣接する体験農園「オガル」の温室施設では野菜や花の苗を生産、寒冷な気候で苗作りが欠かせない中頓地区での貴重な供給基地として機能している。両施設併せて年間、町内外の人たちが延べで一、四〇〇人利用している。



食彩工房「もうもう」

## 中頓別町農業の将来

極めて、概括的に見れば、中頓別では六〇戸弱の酪農家の牛乳生産が町の経済基盤の中核であるが、この農家の営農努力で

農家自身の生活と農協職員等の関係者の就業・生活を支えていくことは、今後の酪農情勢を展望する中ではやはり厳しいといわざるを得ない。

しかし、一方で農協職員と役場の担当者がすべての農家個々の家族構成はもとより個人的な状況を把握する中で、キメ細かな個別対応が出来るということは、弱小資本がお互いに支え合うという点で協同組合の原点でもある。現に、負債整理資金借り入れ農家九戸を経済担当理事三人で三戸ずつ担当し、巡回個別指導をこれ程丹念に行っている農協は道内で決して多くはないであろう。それにしても、いずれ町としても、農協としても単独

での運営は困難になるであろう。

町の方は北海道市町村合併推進構想では、中頓別町は浜頓別町、枝幸町との三町合併案が合併新法期限の平成二十二年に向けて一応の目処となっているし、農協の方は宗谷南部広域合併構想が現状中断しているが、いずれ具体化されるであろう。問題は中頓別の農家が将来にわたって子供たちに自信を持って経営承継させることのできる「希望ある営農」を構築することである。そのために二つの提案をしたい。

### 一、役割モデルの策定

地域内には必ず同じような経営規模で、労働力の状況も同様でありながら、経営的には大きく格差のある農家が存在する。それで経営的によい農家、この農家なら自分たちとそれほど違

わないという農家を選択して、その農家の経営や営農を分析することである。

そして、自分の経営とどこが違うか、どこを見習って努力目標とするかをチェックして具体的な改善目標とする。そのモデル農家を経営形態別に三〜四戸選定して、農協役員、役場の担当者が共通認識を持って他の農家指導をするなら、目標が具体的で、また参考にする点を直接モデル農家に質問できるというメリットもあり効果的ではないか。

現状で単年度赤字経営の農家を引き上げるのは決して容易なことではないが、今後の酪農情勢を見通すなら、早い機会に手を打つ必要があるだろう。経営分析など専門的な部分は外部委託してもよい。場合によっては当研究所も喜んでお手伝いできるであろう。

## 二、集落機能の維持確保

町内は一六の集落から成り立っているが、行政経済の中心は中頓別地区に集中している。

他の集落は旧天北線沿線に点在しているが、離農等の人口流失によって集落機能維持が困難になりつつある。

高齢化、後継者がいないという状況では当然離農問題が発生する。いくら個別の経営が安定していても問題になるのは、集落機能が崩壊することである。

特に中頓別は都市部からは遠隔地であり、たとえ離農したとしても、そのまま現地にとどまる高齢者が混在することになる。住民がお互いに支え合う集落機能の維持は必須条件である。そして中頓別内の地理的な特徴として丘陵地を流れる二本の川沿いに農家が点在しているため、

地理的に近いからといって一つの集落として括れないという問題がある。これは集落再編の時に考慮しなければならぬ要素である。広域合併は効率や合理化を優先するあまり、とかくこうした細かな配慮や地元の感情を無視しがちであるが、地域の活性化は個別の家族と集落の元

気が積み重なって達成するものではないか。私たち個人もそうだが、何か一つ楽しいことがあるとその日一日楽しいものである。地域の活性化も、もちろん様々な項目の底上げも大切だが、地域で何か一つ楽しいことを作り上げていく努力が必要で、行政もその地域住民パワーを引き出す手伝いができるはずである。「中頓別町農業活性化対策協議会」というすばらしい検討の場を活用して、ユニークで一流の「いなか・中頓別」を創造してほしい。

## あとがき

一年前に農業雑誌「農家の友」をばらばらめくっていて、森川さんのことを識った。農協の理事をやりながら、

大規模経営に取り組み、一方で趣味のアンモナイト発掘も楽しまれているとのこと、ニコニコした紹介の写真的バックにはクリーニングされた立派な作品が並んでいた。同好の士として是非一度訪問したいという希望がこうして叶った。残念ながら今回は多忙で一緒に

今回は是非、採取におつきあいしたいと思っている。ますます中頓別が好きになった。

レポーター

(社)北海道地域農業研究所

特別研究員 斉藤勝雄



森川さん夫妻